

幾冬すぎて

伊 藤 勳

平成十二年、私が愛知大学に奉職した頃、英語教員は文学系と語学系がほぼ半々になるやうに配慮されてゐた。東京の或る有名大学でも実学系の学部において教養課程の英語では文学を読むことが求められもした。その大学も平成二十年頃から文学ではなく、学部の専門に關はる内容を英語で読む方向に大きく方向転換していつた。愛知大学も同様に英語教員はほぼ語学系に入れ替はつた。

この傾向は外国語教育に限られたことではなくなつてきてゐる。平成三十年の夏、高等学校の新指導要領が発表され、令和四年から高校の国語の教科書も大きく変わつてゆく。上級校への進学希望者達は論理国語、文学国語、国語表現、古典国語の四科目のうちから、二科目選ぶことになると言ふ。センター試験に代はつて共通テストに移ると実用文しか出題されないの、殆どの高校は論理国語と古典国語を選ぶことになるだらうと、文学関係者の間では今から危惧されてゐる。論理国語といふのは、例へば駐車場の契約書など簡単な契約書、地方自治体の条例、校則などが扱はれるやうである。このやうな由々しき動向に日本文藝家協会でも、その対策に關し議論が数回にわたつて重ねられてゐる。

文章には字面に現れない含みといふものがある。はや四十代の人達には、その含みを読み取らない傾向が窺はれる。それは例へば、母親が子供に自分の使つた茶碗は自分で洗つておきなさいと指示すると、茶碗だけ洗つて箸や湯呑みは洗はないといった類の受け止め方である。所謂実用文とは言葉をそのやうに扱ふことである。文部科学省の役人の人達もそのやうな世代に属してをり、必然的に出るべくして出てきた新指導要領であらう。日本の大学の外国語教育と、このことは揆を一にしてゐる。

言葉には実体はないが、言霊をもつ生き物である。『万葉集』から一例を挙げれば、天津皇子は天武天皇崩御の後、謀反が露見して死を賜つた。不軌を企てるに先立つて伊勢に赴き、姉であるいつきのみやおほくのひめみこ斎宮大伯皇女に會つた。大和に帰る弟を見送つた時、大伯皇女は、「わが背子を大和へ遣るとさ夜更けてあかとき暁露にわが立ち濡れし」(卷二・105)と詠んだ。この歌からは今生の別れとなるかもしれぬはらからの弟への姉の深い惜別の情が、読む者の心にひしひ

しと伝はつてくる。そして詛語田舎で死を賜つたその直前に、天津皇子が、「ももづたふ磬余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」(巻三・416)と詠んだ歌には、限りなく深くも澄んだ悲愁が滲み出ている。朱鳥元年(西暦六八六年)、今から千三百三十年余り前のことである。魂が発する肉聲は言霊に生かされてその張りと輝きを失ふことなく時空を超えて飛来する。直筆もそれ自体に魂が宿る。道元は、たとい反故であつてもそれを落とし紙にすることを戒めた。言葉は実用主義者にとっては生命のない単なる道具でしかないが、人が生きてゆく上では人間関係を繋ぐ生命的媒体であり、人は言葉を信じそれに縋ることによって生きてゐる。しかし単に機械論に抛り所を得てゐる実用的言語はこの詐欺の時代とは実に相性がよい。

論理国語を設けようとするその意図は、有機体論に立つ文藝の論理性を拒み、機械論に立脚する論理性に取つて代へようといふことであらう。言ふも更なり、人間性を豊かに育ててきたものは、文藝における有機的論理性であつた。ギリシア人がことのほか重要視した有機的構築性はすべての藝術の基本であり、優れた藝術家は仕事に取りかかる段階において、詩人であれ美術家であれ、作品の始まりから結末に至るその構築的な形を直観的に捉へてゐる。直観とは即ち飛躍である。しかしその飛躍は縁起によつて出来る飛躍であつて、空想や気まぐれとは無縁である。短詩系文学、殊に俳句の世界では、この飛躍が大きな藝術的効果を担つてゐることは周知の通りである。

古来日本人は、芭蕉の言葉を借りれば、四時を友として暮らしてきた。六世紀初め菩提達磨が南北朝時代の中国に伝へた禅は、やがて日本に入つてからは日本人の心との近親性からその精神に深く根付き、藝術であれ武道であれ、日本の文化の発展の礎となつてきた。相客に心せよといふ茶道の本をなす気遣ひ、思ひやり、御蔭様、お世話になりました、といったこれらの日常の言葉は、日本人がいかに自然界を有機的関係性において認識してゐるかの證しである。縁起説に立つ仏教は自然界を相互依存性を以て捉へてゐる。日本人は古来この認識に立ち他者があつて初めて己があると認識してきた。相互依存性の認識の下に、先のような言葉が生まれてきた。

古代ギリシアにおいては宇宙を機械論ではなく、ひとつの生命体として有機的関係性において認識してゐた。その意識がギリシア藝術、殊に神殿建築における構築性の美として典型的に現れ出ている。その構築性はゲルマン人の敵対的対立ではなく、調和的拮抗として有機体論的効果が発揮されてゐる。この構築性にも見られるギリシア人の有機体論的自然観は、あはれみの心、或いは慈悲として、ギリシア叙事詩や抒情詩、或いは又神話に深い陰翳を与へてゐる。ギリシア人にとつてすべては法爾自然、この自然界に絶対的悪といふ恣意的観念を持ち込むことはなかつた。ホメーロスの『イーリアス』においても、ギリシア方とトロイエー方とを公平に描き、神々も両軍に分かれて戦つてゐる。ギリシア人は自然の本質を正し

く捉へてゐた。有機的關係性に自然の本質があることを認識してゐたところに、憐れみや側隠の情、御蔭様の精神をはぐくんできた日本古来の自然観と通ひ合ふものを含むギリシア人の慈悲の心がある。両者のこの感性の類似性はラフカディオ・ハーンも認めるところである。

日本人の自然における相互依存性の認識、古代ギリシア人に構築性の観念をもたらした有機体論的自然観、即ち自然を關係性において見る自然観においては、自然観察を通した直観が、藝術において真理をもたらすものとなる。直観により、遠い關係の物と物とを結びつけ真理の新たな発見となるのである。これは藝術においても科学においても全く同じ理智の働きである。

翻つて、ゲルマンの象徴思考においては因果を探る自然観察はなされず、空想に終始した。十六、七世紀のイギリスの名立たる哲学者フランシス・ベーコンは、「想像力は物質の法則に縛られることなく、それ自身の都合で、自然が切り離したものを結び合はせ、自然が結びつけたものを切り離したりして、事物の非合法的な縁組と離婚を行なふことができる」(*The Advancement of Learning*)と言つた。片や十八世紀文学の大御所的存在だつたサミュエル・ジョンソンは、機智とは「より厳密且つ哲学的には一種の不調和の調和と見なし得るものであり、似かよりのない形象同士を結合したり、或いは一見似たところのない事物に神秘的な類似を発見すること」であると規定してゐる。そこにおいては、「最も異質な觀念同士が暴力で繋ぎ合はされてゐる」(*Lives of the English Poets*)と言ふ。

日本の伝統的藝術や古代ギリシアの藝術において、自然の真理を無視して恣意的な結合や切断を行なふことはなかつた。ベーコンもジョンソンも自然の摂理を全く度外視した藝術論を語つてゐる。これがゲルマン的象徴思考の特徴である。この種の思考形態はドイツのメルヘンやイギリスのファンタジーといつた自然観察に基づかないたわいのない、時に荒唐無稽な空想物語を生み出すことになる。

禅においては、「山河大地・日月星辰これ心なり」(道元『正法眼蔵』、「身心学道」と言ふ。自然観察するといふことは自己を凝視することである。換言すれば、それができてゐない者は自己が見えてゐないことを意味する。我慢といふ言葉がある。これは本来、^が我を抛り所として心が高慢で他を侮ることを意味する。道元は第十四祖龍樹尊者の、「汝仏性を見んと欲せば、先づ須く我慢を除くべし」(同上、「仏性」といふ言葉を伝えてゐる。自己が見えない者は自己尊大になり他を侮る。ギリシア学者のワイルドはイギリス人が己の姿が認識できてゐない醜悪さをからかふとともに、それ故に押しつけがましいことをして恬として恥ぢないイギリス人を舌鋒鋭く批判した。

ダーウィンもさういふイギリス人を代表する一人であつた。「事実なるものは人を俗悪にする」(“The Decay of Lying”)と言つたワイルドは、人の部屋の鍵穴に耳を釘付けにしてゐる

ジャーナリズムは、「極めて俗悪なるものが生き残るといふあの大層なダーウィンの原則によつて己の存在を正当化してゐる」(“The Critic as Artist”)と誇つてもゐる。ここにはジャーナリズム批判ばかりでなく、有害な変異は棄却され、優位な変異だけが保存集積された最も優位な種類だけが、他の個体を減ぼして生き延びてゆくといふダーウィンの自然選択説における排他的競争原理が揶揄されてゐる。このダーウィンの思想には当時のイギリスの阿漕な植民地政策とその正当化が反映してゐることは言ふまでもない。とまれ、ワイルドはダーウィンには自分の姿が見えてゐないことをも同時に語つてゐるのである。

自然に服従せよと言つたエピクロースは、パルメニデースが絶対的一者論で示す、無の中空に浮かぶ不生不滅の水晶玉のやうな純粹存在の如く、己をして自然をあるがままに受け容れる受容体となした。自己を受容体にするとは自己を忘れることである。自己を忘れることによつて自己を知るのである。禪においても、「自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、^{ばんぼう}万法(註・一切の存在物の意)に証せらるる(註・教へられること)なり」(同上、「現成公案」と言ふ。この受動性において、人は初めて直観を得るのである。能動的に自然に向かつてゆく我慢の姿勢は、自然を知り得ることなく、ただ迷ひに墮するだけである。国語において文学を軽視することはこの理智的直観に基づく論理的構築性の価値を等閑に附すことに他ならない。

古典的名作と呼ばれてきた文学作品は、自然の生命的一体性と聯動する一種の有機的構築物であり、自づとその時代精神をも如実に反映する文化の精華である。作者の肉聲とその息遣ひまでもが伝はつてくる文化遺産である。今必要なものは、自由だとか権利だとか、自然の実相を無視した恣意的な人為的観念ではない。「われらもかの尽十方界の中にあらゆる調度なり。(中略) ^{しんじん}身心ともに尽界にあらはれて、われにあらざるゆゑにしかありとしるなり」(同上、「恚麼」と言ふ。この宇宙において、己は己の物のやうに見えながら己の物ではないが故に、自由ではない。他を妨げない時、人は自由である。これが自然に即することである。かくすることによつて初めて、先の例のやうに、魂の肉聲は時空を超越する。国語教育で名作に、或いは外国語教育で名作の原文に接する機会を与へることは、教育の喜ばしい義務である。今は早、言語教育が情操教育の一端を担つてゐることは忘れられたのである。